

平和紙芝居を読み続けて25年 今、次世代につなげるとき



—紙芝居の活動をはじめたきっかけは？

中村 由利江さん

紙芝居の活動を始めるに当たった経緯を話せば長くなります。

40代で子育てが終わったころ、地域活動をしていました。府中公民館に育休の方がいらっしゃって、私がいろんな活動していたものだから、声をかけてもらいました。

府中公民館では好きなことをやらせてもらっていたんですが、たまたま事務室のロッカーに紙芝居がずらっとあったのを見つけて、読んでいいんですかって聞いてみたんです。それで保育園に読ませてもらったりとか、公民館まつりで読ませてもらったりとか、いろいろなところでやって数年きたんですね。

45歳ぐらいから本格的にちょっと紙芝居するようになって、女性だったらね、 드라이ヤーかけたり化粧したり、服を着替えたり、今日はどれにしようか悩むよりか、「紙芝居のおっちゃん」として活動すれば格好を選ぶのが楽になるとひらめきました。車の中で帽子を被ると紙芝居のスイッチが入りました。

—紙芝居の思い出はありますか？

中村 由利江さん

昭和30年、5歳の頃かな。戦後で何もテレビもない時代よね。紙芝居のおっちゃん came。戦後、復員兵で仕事がない人もいらっしゃって、紙芝居をして子供に駄菓子売って小銭を稼いでいた。お菓子は当時5円だったと思う。それで、お菓子を5円と交換して食べながら、『月光仮面』とかの紙芝居を見ていた。たまたま私が出会った紙芝居のおっちゃんは読み聞かせが上手でいつもワクワクしていた。そのおっちゃんがルーツになっている。

あと、両親が原爆に遭っているんですけども、父は世界大戦前の日清事変の時に中国の方へ兵隊にとられたんですよ。まず腹を撃たれ野戦病院で治療を受けたら、また「戦地に行け」と。そしたら今度は首を撃たれて、野戦病院で麻酔なしで喉切開されたんです。それで喉に穴が開いてしまい、うまく声を出せない。それで父は私にラジオから流れる美空ひばりさんの歌を歌え、歌えと言いました。歌うととても喜んでくれて、めちゃくちゃかわいがってくれた。音楽をいつも一緒に膝の上で聞いていた。

そういう幼少期を過ごしました。

—そのようにして紙芝居を読まれるようになるんですね。

中村 由利江さん

大人になって結婚して、子ども3人産んで、子育てが終わった時点で地域活動を始めました。最初、肩書きがないもんですから主婦ですよ。



—平和紙芝居を始められたのは？

中村 由利江さん

ちょうど50歳の時に主人が肺がんで亡くなったんだけど、結婚記念日は8月6日で広島が被爆とした日と同じで、また主人が亡くなったのも11月6日なんですよ。6という数字がどうも私にとって縁があるようで。

ちょっとお礼の気持ちもあって、(府中公民)館長さんをお願いして紙芝居をお借りして、平和公園(広島平和記念公園)で自転車に昔のイメージで旗を立てて、本当に軽い気持ちで平和紙芝居を読んできたんですね。警備員さんが来て、「勝手にやっちゃ困るんだけど……」、「すみません！」っていうやりとりをしたら、たまたま、通りかかりの(広島)市役所の方が話を聞いてくれちゃって。「じゃあ今日だけ特別に許可します。来年から申請書を市役所に出してください」と仰ってくれたんですよ。それから10年ぐらいは市役所へ行って申請していたんだけど、それからは向こう(広島市)から「ぜひやってください」と言われるようになりました。

(平和記念公園で紙芝居を読むと)人が集まり、その中には海外の方もたくさんいらっしゃった。「紙芝居を英訳してくれないか」と言われ、府中町国際交流協会の協力を得て英訳してもらいました。英語で紙芝居を読むために3年間ヒアリングして練習しました。

—中高生とも活動されていますね。

中村 由利江さん

私も高齢になってきて、(佐々木)禎子ちゃんって中学1年生で亡くなったということもあるので、やっぱり同年代の子に読んでもらうのがいいんじゃないかと思って。演劇部のある緑中(府中緑ヶ丘中学校)にお願いに行くと、緑中の子数人が平和公園に来てくれました。

その次は、英語を学び海外との交流がある安芸府中高校国際科にも頼もうと。そして「府中中(学校)もあるよね」って、みんなが気が付いて声をかけて、それから3校一緒に活動するようになりました。

紙芝居は演者と絵と言葉の劇場なんです。中学生は演劇部だから声が出る。高校生は英語がうまい。お互いがリスペクトし合いながら、いい相乗効果でやってきています。

—そして、息子さん(中村 竜也さん)とも活動されるわけですね。

中村 由利江さん

私は人権紙芝居の読み聞かせ活動もやっていて、去年から息子を連れていきます。読み聞かせ中に咳込んだりして、「やばいな」と思って。で今年、息子が北小(府中北小学校)で紙芝居を読んできました。私、女性なんで、男性のお医者さんの声とか結構リアルに感じて、女の子の声はちょっと高めにしたりと工夫してくれて、「もうお任せしていいな」って。





—お母様の活動を受け継ぐという感じなんですか？

中村 竜也さん

25年間ずっと横目で見ている、大事なことはあるなとは思っていました。僕らの世代って今は、次世代に伝えるっていう意識がすごく高まっているとは思っています。

僕らの若い頃は平和学習を受けて終わりという感じでした。伝えるというその作業までは教えてくれないし、そこを求められてなかった。なんでかっていうと、やっぱり母のような世代がしっかり伝えてくれていたし、おじいちゃんおばあちゃんが戦争を経験して、それを子どもたち、孫たちにしっかり伝えてくれていたんで、わざわざ僕らが動かなくてもよかった。

ただ、やっぱりそうした世代は高齢化するんです。そういう問題が浮き彫りになって、僕らの世代は何もやっていなかったんだな、と実感しています。それで、何かできるかなと思った時に、僕の場合はたまたま母がこういう活動をしてたんで、母も高齢化していく中でなかなか活動も難しくなっていくんだしたら、それを受け継いでやればいい。そんなきっかけです。

何かをやらなきゃという思いは多分僕ら世代でわりと持っている人も多いと思うんですけど、じゃあ何やっていいんだろう、とか、表現していく上で伝え方がわからないんじゃないでしょうか。僕の場合、たまたま紙芝居というものがあつたんで、それで伝えれるなって、そのままずっと受け入れたっていうのはありますね。次世代がその活動を誰に引き継いでもら

かとなった時に、課題になってくるのかなと思います。

中村 由利江さん

その伝え方は変わってもいい。とにかく次世代にそれを残していく。新聞記者さんに話を聞いたら、新聞とか書籍というのは形に残せるということに意義があるんじゃないかということで、平和に関する連載を始められたそうです。

紙芝居も残るんですよ、形として。ただ動かして使う紙ですから、だんだん朽ちていく。今使っているのは復刻版。

中村 竜也さん

(実物を見せながら) こういうふうには物として残すことはできるけど、やはり紙芝居は本と違って自分で読むものじゃない。やっぱり読んでくれる人がいないと成り立たないんです。紙芝居の需要がどんどん減ってきている中、母の活動は残すべきだと思いました。でも、誰かにやってくださいとお願いするぐらいだったら、自分で。ひよんなことから多少の読み聞かせの経験をしたこともあって、読むことがだんだん楽しくなっていたこともあり、じゃあ紙芝居も読んでみようって。母の活動も僕が引き継いで、また誰かにバトンを渡せる可能性が上がるので。

中村 由利江さん

昔、平和公園で読んでいた時に、フランスのお嬢さんが来られて、「絵が動いている。映画を見ているようだ」って仰ったんです。それって心が動く、感情移入しちゃったってことですよ。紙芝居だって心を動かせるのだという喜びを感じました。もう相当数、紙芝居を読んでいるんだけど、読み方が毎回違ってきます。ここをちょっと強調するとかね。

今年、平和学習で帯同させてもらっている北小6年生の子どもたちは、とても集中して聞いてくれました。「ちょっと静かにしなさい」とか、指導がいらなかったんです。こんな効果が紙芝居にあるんだと思いました。

一息子さんに引き継ぐというのはどう感じておられますか？

中村 由利江さん

高齢になると、どこかで誰かにバトンタッチする気持ちというものもあるのかなと思っています。例えば私は運転免許を返納したんだけど、そうした切り替えをどう自分でやるか、かなと思います。

中村 竜也さん

自分ではなかなか決断できない。僕が「返納

しなさい」と言いました（笑）。自分ではわからなかったのではないかと思います。

中村 由利江さん

そういう、きっかけですよ（笑）。たまたま同居人だったから、うまく会話できてスムーズに決断できたんだと思う。

中村 竜也さん

紙芝居も同じで、私がやると言ったのは、母が紙芝居の時咳き込んだのを見てのことです。体力的に無理が来ていると。

中村 由利江さん

立ちっぱなしで読むというのは、もう去年はしていないんですよ。

中村 竜也さん

母には、活動の原点である「祈り」のための紙芝居は続けてほしいと言っています。それを見て何かを感じてくださる方もいらっしゃると思うので。これからの時代、平和に関することは何でも残していった方がいい。

（戦争や被爆の）実体験を語ってくれる人がいなくなっちゃう中で、被爆者のリアルな話を聞いてそのまま事務的に伝えるだけでは、なかなか受け手の心って動きにくいと思うんです。僕たちには実体験はないけど、実体験を直接聞いている世代です。その実体験を聞いて心が動いた私の感情を乗せて紙芝居を読めば、子どもたちが真剣に聞いてくれたり、心を動かせたりということもあるんだと思います。

中村 由利江さん

原爆や平和を次世代に知ってもらおうという読み聞かせは息子がやってくれます。私は原点の「祈り」に立ち返ろうかな。



—最初に思い立って平和公園に行かれた時は、どのぐらいの方が聞かれたんですか？

中村 由利江さん

4～5人かな。でも紙芝居って不思議なんだけど、1人が聞いたら集まってくる。1日中やってるから、灯籠流しの人、特に子連れの方が多い。紙芝居の最後だけを聞いた子が「最初から聞きたい！」ってなって、紙芝居を繰り返すんです。で、「集まってください」とか、「前に座ってください」と言わなくても、平和公園に来る方たちはすごい思いやりがある。

—平和紙芝居の力ですね。

中村 由利江さん

平和に対する気持ちというか、被爆した両親もね、悲惨な状況を言葉にしていってできなかったですよ。辛いだけでね。身重だった母はピカドンで端まで吹き飛ばされて、雷が怖くなった。98歳で亡くなりました。父は戦争で大変な思いをしたから、「生きてるだけでいいんじゃない」とよく言っていました。勉強で一番になれとか、かけっこで一番になれとか言わず、めちゃくちゃ可愛がられた。音楽が好きで一緒に聞いていたから、私も音楽が好きになった。

で、そうしたことが紙芝居をするときに演歌を歌ったり、ゲームしたりで役に立った。小さい子から高齢者まで紙芝居を楽しんでくれてね。人生、わからんもんよね。

—紙芝居で何か工夫をされたことはありますか？

中村 由利江さん

耳の聞こえない方のために手話と一緒に紙芝居をやったことがあります。ゆっくりしゃべらないと、手話が追いついてこないというのが学びでした。ちょっと難しいのが、紙芝居の場合はあまりゆっくり読み過ぎてはいけない。手話用のセリフにした紙芝居があればいいですよ。

中村 竜也さん

この紙芝居では、目の見えない方も耳の聞こえない方も同じ内容で一緒に楽しんでもらうというのはちょっと難しい。そこは対象者に合わせる必要がある。英語もそうですよね。相手に伝わるのが大事なんです。

—最後の質問です。今年募集した平和標語で審査員を務められました。どのような目線で審査されましたか？

中村 由利江さん

大人向け、子どもさん向け、若者向けという3つの基準をもって選ばせてもらいました。ど

の作品も素晴らしい思いを込めておられたので、なかなか優劣つけるものではないのですが、読んで響きがいいものを重視しました。これを全国に発信するんだったら、府中町から発信していただきたいな。あと、普段の活動でお配りしている「鉛筆のしおり」に標語を入れたいと思っています。

そういえば、今、国旗のブローチを作って8月の（歴史民俗資料館）ギャラリー展で飾ろうと思ってるんです。こんなに国あって戦争を起きたりしているということが、子どもさんにわかってもらえれば。地球は1つしかないじゃけどね。

中村 竜也さん

府中町も非核宣言を早い段階で行った先駆けの町なので、この80年を機に、平和推進にもっと取り組んでももらえればと思います。

